



明治期に多くの移民が米国・ハワイに渡った縁で、瀬戸内のハワイと呼ばれる周防大島町。まるでハワイにいるかのような「ぶち海」に囲まれています。

2021年夏、県内の小学5、6年生計22人が「ぶち海体験隊」を結成。同町沖で海底に広がる世界最大級のニホンアワサンゴの群生地を観察するなど、群生地誕生の謎に迫るとともに、近年の「海の異変」の原因を探りました。隊員たちの活動の様子を紹介します。

日本財団(東京)が推進する「海と日本プロジェクト」の一環で、KRY山口放送(周南市)などで行く実行委員会が主催しました。

瀬戸内のハワイで“ぶち海”満喫

ニホンアワサンゴ群生の
ナゾに迫る!!

周防大島町沖の海底に広がる世界最大級のニホンアワサンゴの群生地

日本財団 THE NIPPON FOUNDATION 海と日本 PROJECT in やまぐち

みる。きく。つなぐ。KRY

「海と日本プロジェクトinやまぐち」実行委員会では、やまぐちの海の現状をテレビ・ラジオやイベント、インターネット等を通じて1人でも多くの県民の皆様にご覧いただき、明日を担う子供達をはじめとした人々が未来につながる行動に結びつけることを目指しています。

海と日本プロジェクトinやまぐちは、日本財団が推進する「海と日本プロジェクト」の取り組みの一環として行っています。

「#日本財団」「#海と日本」で投稿してね!
Facebook/Twitter/Instagram

海と日本 山口 検索





なぎさ水族館に常設展示されているアワサンゴの水槽

海の花束

ニホンアワサンゴって???

「海の花束」緑色に蛍光発光 子どもたち熱心に学ぶ

なぎさ水族館

子どもたちが最初に訪れたのは「なぎさ水族館(周防大島町伊保田)です。同館では2011年から本格的にニホンアワサンゴを飼育。16年には世界で初めて人工繁殖に成功しました。同館学芸員の内田博陽さん(37)が水槽の前で、「アワサンゴってどういう生き物かわかりますか」などと問いかけ、生態や特性などを説明。子どもたちも熱心に質問し、メモを取りました。

アワサンゴは緑色の触手を広げる美しい姿から「海の花束」と呼ばれています。内田さんによると、イソギンチャクやクラゲと同じ仲間の刺胞動物です。12本ある触手の先端の白い点模様が「アワ」に見えることから、その名前がついたと言われています。子どもたちは、水槽内を暗くして青いライトを当てると、アワサンゴに含まれるたんぱく質が緑色に蛍光発光する様子を観察。アワサンゴはこの特性により、褐虫藻という単細胞生物を引きつけて体内に取り込み、栄養を得ているのではないかと、ということでした。



子どもたちにアワサンゴの特性を説明する内田さん



人気はタッチングプール

ヒトデなどに触れることができる

「日本一小さい水族館」として親しまれる「なぎさ水族館」。ニホンアワサンゴ以外にも近海にすむ魚やクラゲなど約80種類、約750点の海の生き物が展示

されています。魚などに直接触れることのできる「タッチングプール」も人気です。ドチザメやヒトデ、ナマコ、ヤドカリなどがいて、子どもたちの歓声が

響ぎます。
入館料は一般210円、小学生100円。開館は午前9時〜午後4時半。問い合わせは同館(0820・75・1571)へ。



周防大島町ってこんなところ

カウアイ島と姉妹島

夏は海水浴、キャンプ客にぎわう



周防大島町(手前)と本州(柳井市)を結ぶ大島大橋

周防大島町は山口県の最東端にあり、瀬戸内海に浮かぶ本島・屋代島と、その周囲の五つの有人島、多くの無人島からなります。本州(柳井市)とは屋代島が大島大橋(長さ1020m)でつながっています。2004年10月に大島、久賀、橘、東和の旧4町が合併し、周防大島町となりました。

屋代島とハワイ州カウアイ島

は1963年に姉妹島提携を結んでいます。温暖な気候に恵まれ、夏には海水浴やキャンプを楽しむ家族連れらでにぎわいます。フラダンスのイベントも数多く開催されます。民俗学者の宮本常一と、作詞家の星野哲郎(ともに故人)の功績を顕彰する記念館がそれぞれあります。

21年10月末現在、1万4871人が暮らしています。

周防大島の地図

- 1 大島大橋
- 2 なぎさ水族館
- 3 ニホンアワサンゴ群生地



※アワサンゴの写真はいずれも藤本正明さん撮影

通常の様子



「海の花束」とも呼ばれるニホンアワサンゴ。周防大島町沖には世界最大規模を誇る群生地が広がる。

里山が育む群生地 昨秋大量死見つかる



2020年 10月

昨年10月、大量死が確認された。



緑色の触手に粒状の幼生を保有したアワサンゴ。

少しずつ復活!

よく観察すると...



2021年 10月

今年10月に撮影した、昨年死滅が見つかった場所。



「古里の豊かな海を守ろう」と呼びかける藤本さん

長年、周防大島町沖でニホンアワサンゴの観察、保護活動を続ける環境省委嘱の自然公園指導員、藤本正明さん(67)(柳井市)が、隊員たちを前に、群生地誕生の謎や近年の「海の異変」などについて話しました。藤本さんは元小学校教諭。2009年からスキューバダイビング仲間と群生地を調査し、保護に取り組むようになりまし。13年には町の協力を得て、環境省の海域公園地区指定を実現。今年年間100日以上潜水、アワサンゴの成長を見守っています。

保護活動者語る「4、5年で元に戻れば」

同町地家室沖の白髪磯の周辺には、約3000平方メートルにわたる竹林を伐採し、アベマキの苗木を植樹するなど活動も継続しています。昨年秋、アワサンゴが大量に死滅しているのが発見されました。原因についてはっきりとしたことは分かりませんが、大雨による泥の流入や酸素不足、水温、水質の変化などではないかという事です。

今夏、藤本さんは、大量死が見つかった場所でも緑色の触手に粒状の幼生を保有したアワサンゴの姿を確認しました。「このまま育てば、4、5年で元のようになるのでは」と期待を寄せられています。藤本さんは最後に子どもたちに向かって「皆さんが大人になった時も、この素晴らしい海で様々な活動ができるよう私たちも頑張りましょう。皆さんも環境保全や、自分たちの普段の生活で何ができるのかをしっかりと勉強してくださいね」



里山に面した海域に浮かぶ白髪磯(藤本さん提供)

海の花束守るぞ

海と山のつながり実感

今、自分たちにできること

「なぜ周防大島の海にアワサングの群生地が?」「復活していただきたいな」——。関係者から話を聞くなどした隊員たちは早速、現地の海へ山へと繰り出しました。自然に触れ合ったり遊んだりして、「海」と「山」の密接なつながりを実感。アワサングが順調に育つ様子も確認でき、笑顔がはじけました。

球根の植え付けを手伝う子どもたち



里山にスイセン彩る

隊員たちも植え付け手伝う

里山入り口の「水仙の里」では、子どもたちがスコップなどを手にスイセンの球根を植える手伝いをしました。水仙の里は、同町と柳井市の住民でつくる「県東部海域にエコツアーズ」を推進する会が段々畑を活用して整備。会長を務める藤本さんは「12月から来年1月にかけて白くかわいらしい花が咲く。見て来てほしい」と呼びかけていました。



アワサングみつけたよ



真夏の太陽の下、海に入って歓声を上げる子どもたち



里山山頂の広場で長いブランコを楽しむ隊員

アベマキの森を見学

アワサングが生息する海域を望む里山では、地元住民らが竹林を伐採し、アベマキの苗木を植樹するなど緑豊かな森を守る活動が進みます。子どもたちは山頂にある広場で夏の弁当を食べた後、長さ12メートルのブランコで遊ぶ予定です。

昼食を食べた後はハンモックでのんびり



アベマキの森を見学したりしました。隊員たちは「美しい海を守るためには、山もきれいにしなければなりません。子どもたちも口をそろえていました。」



アベマキの森を見学する子どもたち

海藻の下に青緑色の姿!

真夏の海に飛び込みアワサング観察

外入の港でライフジャケットに腕を通した子どもたちは漁船に乗り込み、地家室沖の二ホンアワサングの群生地へ。10分ほどで現場に到着。ゴーグルを付けて船の上から次々と海に飛び込み「つめたーい!」と歓声を上げました。顔を海面につけ、海底のアワサングを確認した竹中峻登君(下松市立下松小6年)は「きれいな緑色だった。楽しい」と声を弾ませ、中原夕依さん(周南市立富田西小5年)も「海藻の下に青緑色の姿が見えた」とうれしそうでした。

いっしょに活動しよう!

「アワサング」イメージのスイーツ商品化

スイーツ作りにも取り組まれました。隊員たちが出し合ったアイデアをもとに、地元の菓子店「幸進堂」(周防大島町西安下)が二ホンアワサングをイメージしたクッキー2種類を商品化しました。クッキーと、同店人気の「うずろー」のセット「海のお花畑」の贈りものが

30個限定で500円。10月30日には道の駅「サザンセット」(同町西方)で販売会が開かれました。家族で訪れた岡崎美衣さん(防府市立牟礼小5年)は「私たちの思いが詰まったスイーツが商品になってうれしい。これを食べアワサングに関心を持ってほしい」と話していました。

商品化された二ホンアワサングクッキー



- #アワサング
- #イメージスイーツ
- #保護活動

町内の道の駅で開かれた販売会には隊員とその家族の姿も



楽しく自由な発想でアイデアを出し合った!



売り上げの一部を二ホンアワサングの保護活動に役立ててもらうことにしています。

問い合わせは、幸進堂(0820770166)へ。

お兄ちゃん、お姉ちゃんが体験サポート!

体験隊の活動には、地元の周防大島高と、長門市の天津緑洋高の生徒計8人が「学びサポーター」として同行。隊員たちと一緒に海に入るなどして、交流を深めました。天津緑洋高2年、三好想さんは自身も小学生の時、同プロジェクトに参加した経験があり、「子どもたちと普段できない体験を楽しみたい」と話しました。校内の水槽でアワサングの飼育、研究をしている周防大島普通科環境コース3年、山口和輝さんは「子どもたちにも、アワサングを通して自然の大切さを知ってもらえるとうれしい」と笑顔を見せていました。

「学びサポーター」として参加した高校生8人



体験隊の活動には、地元の周防大島高と、長門市の天津緑洋高の生徒計8人が「学びサポーター」として同行。隊員たちと一緒に海に入るなどして、交流を深めました。



● 原優司さん「周防大島の海新聞」宇部市立恩田小6年

見出し、色使い、イラストが素晴らしいので、グイグイ紙面に引き込まれました。文章もわかりやすい。クイズで大切なポイントを表現するという工夫に感心しました。研究者になって、ぜひ美しい地球を守ってください。期待しています。

カラフル！ 体験新聞

ぶち海体験隊の子どもたちは周防大島町で7、8月の計2日間、「記者」になって海の様子や関係者取材しました。学んだことや感じたことなどを一人ずつオリジナルの新聞にまとめ、10月30日～11月7日には、道の駅「サザンセトとうわ」に展示しました。

新聞のタイトルは「海は宝物」「真夏の大冒険」「地球」「アワサンゴのなぞ」など様々。写真やイラスト、見出しをふんだんに使ったカラフルな作品ばかりで、ニホンアワサンゴが生息する豊かな自然を未来につなげたいとの思いが伝わってきます。

6作品を紹介します。講評は読売新聞西部本社「新聞のちから」委員会の高橋淳夫講師が担当しました。



● 田中晴渡さん「海と森新聞」柳井市立柳井小6年

観察の様子を詳しく書いていて、海の中の様子がリアルに伝わってきます。ニホンアワサンゴ減少の原因をさぐるだけでなく、具体的な対策(ごみ拾い)に結びつけている点が素晴らしいと思います。題字と見出しから、海と森、ニホンアワサンゴと植物のつながりが伝わってきます。



● 石井陽菜さん「地球新聞」下関市立向山小6年

ひとめ見て「読みたい」と思う新聞に仕上がっています。各項目の整理の仕方が抜群にうまい、と思います。ニホンアワサンゴを巡る状況を、「地球」の問題だととらえたのですね。まさにSDGsにつながる作品だと感じました。



遠藤美莉亜さん「きれいな海は宝物新聞」山口市立上郷小6年

作品のストーリーがしっかりしています。ストーリーにあわせて、イラストや写真を効果的に使っています。インタビューの新たな気づきをうまくまとめていて、最初から最後まで一気に読むことができる作品に仕上がっています。



隅田健斗さん「アワサongoなど新聞」柳井市立新庄小5年

とてもよく考えて紙面を作ったことが伝わってきます。文章も写真もイラストも素晴らしいと思います。地域の高齢化が進んで山を手入れする人がなくなると竹が増え、ニホンアワサongoにも影響することがよくわかりました。

動画で学んだ「世界に一つだけの新聞」づくり



自由で楽しい「体験新聞」を！
 良い新聞を作るポイント
 ▽「伝えたいこと」を明確に
 ▽わかりやすく書く
 →読む人の立場で考える



例年、読売新聞の記者が講師を務める「新聞づくり教室」は、新型コロナウイルス感染症拡大を受けて中止に。昨年同様、

新聞づくりのポイントを動画にしてオンライン配信しました。写真。動画では実際の読売新聞を参考に示し、「見出しは最も大切な言葉や絶対に伝えたい言葉を「第1段落は伝えたいことをギュッとまとめた短い文章に」と説明。「世界に一つだけの楽しい体験新聞をつくらう」と呼びかけました。



西岡恵汰さん「真夏の新聞」下松市立東陽小5年

ニホンアワサongoとアベマキの写真をハートマークの色紙にはりつけ、互いの関係をうまく表現しています。「真夏の真夏」というフレーズは、オリンピックを含め今夏を象徴する言葉だと感じました。新たなスイーツが、多くの人に環境問題を考えてもらうきっかけになればいいですね。



山口県知事に体験活動を報告!



「自然体験授業や課外活動、交歓宿泊学習を」



子どもたちがビデオメッセージ



「ニホンアワサングを通して海の未来を考えました」「私たちでもできることがあると信じて、環境や海、生き物のことをもっと勉強していきたい」「海や森などの環境を守る活動に積極的に関わっていききたい」。

当初、活動の締めくくりとして子どもたちが村岡副知事に直接、報告を予定していましたが、新型コロナウイルス感染の広がりを受けて隊員たちの訪問は自粛しました。そこで体験したことや感じたことなどを5分程度のビデオメッセージにまとめました。写真。

ビデオには22人の隊員を代表して、▽古賀美葵さん(山口大付属光小5年)▽田中晴渡さん(柳井市立柳井小6年)▽津田泰一さん(山口市立良城小6年)▽石井陽菜さん(下関市立向山小6年)▽原優司さん(宇部市立恩田小6年)の5人が出演。ニホンアワサングの群生地を確認したことや、里山保全の一環でスイセンを植える手伝いをしたことなどを報告しています。

その上で知事に対し、①自然を体験する授業や課外活動をさせてください②山が近くにある学校、海が近くにある学校、川が近くにある学校、それぞれをつなぐ交歓宿泊学習のような活動がしたい――の2点をお願いしました。



知事「豊かな美しい自然、未来に引き継ぐ」

KRY山口放送のアナウンサーで「海と日本プロジェクト」やまち推進大使の深澤朝香さんと、プロジェクトの運営に当たったライフスタイル協同組合の船崎美智子代表理事が9月下旬、県庁に村岡知事を訪ね、隊員たちのビデオメッセージを届けました。

ビデオメッセージを見た知事は「とても心強く感じました。豊かな美しい自然を、皆さんと力を合わせて未来に向けてしっかりと引き継いでいきたい」と話していました。

推進大使、子どもたちの思い届ける



村岡知事(手前)に活動を報告する深澤さん(左)と船崎さん

読売DoMo新聞

月額 550円(税込み)

毎週 木曜日 発行

オールカラー／タブロイド判／20ページ

わかりやすい
ニュース

読解力を
高める

楽しみながら
学べる

イラストや写真を大きく使った紙面は、ニュースや社会の仕組みを楽しく、分かりやすくお伝えするレイアウトです。その他、スポーツ・ファッション等バラエティー豊かな話題が充実。学習ページは大手学習塾四谷大塚の監修でしっかりと学べます。

週1回だから
気軽に読める

月額 850円(税込み)

毎週 金曜日 発行

オールカラー／タブロイド判／24ページ

時事問題を
一気に
チェック

受験に
強くなる

多彩な
コンテンツ

ニュース面は世の中で話題の社会事象や時事ニュースをカラー図表をもとにじっくり解説。短時間でも効率的に情報を得られる工夫をしています。学習面は、中高生がともに活用できる充実した内容。英語は英会話と長文読解の2面を用意しています。その他ファッション、書評、エンタメなどをラインアップ。

読売 中高生 新聞

特別協力/小学館



電話でのお問い合わせ・お申し込み

0120-4343-81
またはお近くの読売センターまで

携帯電話・スマートフォン

右記 二次元コードをスマートフォンまたは携帯電話で読み取りください。



一部対応していない機種もございます。その際にはお電話でお願いいたします。